



在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校

# 学校通信 Respect

令和2年2月27日

NO. 11



もうすぐ日本各地から桜だよりが届く時季となりました。

いざ子供 山辺に行かむ 桜見に 明日とも言はば 散りもこそせめ

さあ、子供たち 山の方へお花見に行こう。明日なんて言っていたら、桜の花は散ってしまうじゃないか。

上の和歌（短歌）は、江戸時代後期の名僧『良寛』が詠んだものです。良寛和尚は今から260年以上前の1758（宝暦8）年12月、越後出雲崎（現・新潟県三島郡出雲崎町）の名主の次男として生まれましたが、長男が早くに亡くなってしまったため、幼い頃は名主の跡取りとして大切に育てられました。18歳で出家した後、4年間を故郷の光照寺で過ごし、その当時越後に来ていた高僧国仙和尚に師事して得度し、僧名「大愚良寛」となりました。その後、国仙和尚が住職を勤める備中（岡山）玉島の曹洞宗円通寺に赴き、厳しい禅の修行を積んだそうです。良寛和尚は「子供の純真な心こそが誠の仏の心」と解釈し、子供達と遊ぶことを好み、かくれんぼや手毬をついたりしてよく遊んだと言い伝えられています（懐には常に手毬を入れていたそうです）。良寛和尚は名書家としても知られており、人々に請われると経を読み、筆をとって書をしたためることも多くありました。とくに、子供達から夙に文字を書いてほしいと頼まれた時には、喜んで『天上大風』という字を書いたそうです。ただ、高名な人物からの書の依頼は丁重に断ることが多かったようです。良寛和尚は、彼の生涯の生活のなかで、一人で仏を思い、書をしたため歌を詠み、托鉢し乞食し、時に行脚に出て遊行しました。また上の和歌のように子供たちと日の暮れるのも忘れて無邪気に遊び戯れていたということです。



ところで、良寛和尚は上の和歌を通して、人が生きていく上で大切なことを私たちに伝えたかったのではないのでしょうか。つまり、良寛和尚は、面倒なことやいやなことを「明日にしよう、またこの次にしよう。」と後回しにしていまいがちな私たちに、桜の花という身近な例をあげながら、今日をいかに充実して生きるか、今日一日を精一杯大切に生きてほしい、と人々に願ったのだと思います。

年度末の3月を迎えるにあたって、「明日とも 言はば 散りもこそせめ」と心の中で静かに何度も念じながら、最後の最後まで、日々新たな気持ちでジョホール日本人学校の教育活動に携わっていきたいと思います。

校長 角 保宏